百里の闘いが、労働運動を励ます

―「平和公園」訪問者の声より―

地に根を張った運動の力強さ

東京公務公共一般　　中嶋祥子

東京公務公共一般労働組合が毎年夏に取り組んでいる、歴史に学ぶ夏の旅は今年で26回を数え、8月6～7日「住井すゑ文学館・百里基地・満蒙開拓内原訓練所見学の旅」をマイクロバスにて行いました。コロナ禍のため細心の感染防止をし、実行できたことが喜びです。

百里基地の闘いは、現地の人々と直接お会いして、半世紀を越える反戦農民闘争の歴史をお聞きし学びました。“百聞は一見に如かず”　平和公園の小屋の上から眺めると、くの字に曲がった誘導路が誇らしげに見えました。元射撃場の九条の丘には「自衛隊は憲法違反」の巨大な看板が堂々と誇らしげに建てられています。基地を案内してくださった方々の優しさに触れ、確固とした地に根を張った運動の力強さを直に感じました。

私たち公共一般は名実ともに闘う労働組合として、常に闘争と争議を抱え1990年結成以来10,000人もの人々を勝利に導いています。百里基地見学で触れた力強さは、私たちの運動に限りない励ましを与えて戴きました。

「堂々と」・・・百里基地を訪問して

中村行秀

コロナ禍によって2年の中断を余儀なくされた組合恒例の「歴史に学ぶ夏の旅」が、今年は、「住井すゑ文学館訪問・百里基地の農民闘争に学ぶ旅」と題して実現できました。

茨城県牛久方面の住井すゑ文学館、予科練平和祈念館、百里基地、満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所が主な訪問先で、8月6，7日だったこともあり「戦争とは何か」を考えるよい機会になりました。

百里基地のなかにある「百里平和公園」では、66年間基地基地反対の闘いを続ける「百里の会」の方々に、貴重な知識体験を伺うことができました。百里基地は、元は、太平洋戦争中に国が農地を接収して作った日本軍の「百里原飛行場」で、戦後、農民がその荒れ地を開拓した農地であるものを、朝鮮戦争（1950～53）を境にアメリカの対日政策の変更によって、国は再び憲法違反の自衛隊の基地にしようとしたものであり、百里基地闘争は国のこうした不条理との闘いであること。

その闘いの中で、「一坪地主」や「共有地主」など農民の知恵と力の成果である「くの字型に曲がった誘導路」を平和公園内の「展望台」から見せてもらいました。

真夏の炎天下の懇切な説明にはもちろん、特に心打たれたのは百里の方々の堂々とした明るさでした。

10月9日（日）に平和公園の草刈りを行います

9時30分に平和公園集合　参加可能な方は、080-9457-6381まで。

百 里 の 会

第23号　2022年9月25日

一般社団法人
百里の会
茨城県水戸市見川 5-127-281
Tel 080-9457-6381
E-mail hyakurip@gmail.com
HP　https://hyakurip.web.fc2.com

基地を見下ろす大看板
自衛隊は憲法違反は
５０年間、何を見てきたか その5

１６ 一人二役を演じたマッカーサー

日本を無条件降伏させたポツダム宣言を引っ提げて厚木に降り立ったマッカーサー。彼には、日本の改革者（ポツダム宣言実施）としての連合国最高司令官という肩書と、アメリカ太平洋陸軍総司令官という軍人としての肩書がありました。6年8カ月（1945年8月～52年4月）という長い占領時代の歴史的舞台で一人二役の主人公を演じます。最初の主役を演じたわずか1年3カ月の間に、戦前の軍国主義政治で圧殺されていた自由と平等、平和と民主主義、市民的自由、基本的人権の確立などの民主化を実施し、同時にその民主化を盛り込んだ日本国憲法を制定したことです。

それは、アメリカの単独占領で他の連合国の干渉を受けなかったこと。旧日本の支配層はマッカーサーの絶対的権力の前に従わざるを得なかったこと。マッカーサー自身、敬虔なクリスチャンとして「東洋のスイスたれ」と日本の永世中立をめざしていたこと。民主化・憲法制定に関わった民政局のメンバーは20代、30代のニューディーラー（急進的改革者）で干渉されることなく理想的に事に当たれたこと。地理的に日本が島国であったこともプラスに作用したこと等々が考えられます。

戦前日本の軍隊は中国・アジアを侵略・占領し、残虐の限りを尽くしました。日本国民は立場が逆転し日本がどんな目に合うか動転しますが、連合軍は徹底した民主化を要求します。ここに20世紀前半の戦争の時代（第1次・第2次大戦）から後半の平和を求める世界の国々・人々の大きな転換を見ることができます。日本の戦後民主化と新憲法制定はその世界史的なシンボルとなり国際連合・世界人権宣言とともに新しい戦後の出発点となったのです（民主化の内容、憲法制定の経過などは後日記します）。

マッカーサーの次の主役の役目は、9条を否定する再軍備を日本政府に命令したことです。「東洋のスイスたれ」と日本の永世中立をめざしたマッカーサーでありましたが、米ソ冷戦が激化し朝鮮戦争が勃発すると、マッカーサーは憲法施行わずか3年足らずで9条を蹂躙する日本の再軍備・警察予備隊の創設を日本政府に命令します（1950年6月25日の朝鮮戦争勃発後の7月8日）。それは最早、改革者のマッカーサーではなく本来の軍人としての顔でした。

一人二役を歴史的に背負ったマッカーサー。平和と戦争の歯車を回したマッカーサー。そして私たち国民の大多数は悲惨な戦争体験から、二度と戦争はしないという9条のこころ（憲法体制）を堅持する一方、アメリカの世界戦略に引きずられ戦争政策に走る自民党・保守勢力の安保体制との矛盾のなかで戦後の道を歩んで現在に至ります。

自ら権威主義者であると自認するマッカーサーは3年足らずで9条を改正するわけにもいかず、是は是、非は非という西洋の合理的精神を捨て、戦力不保持という9条の上に日本再軍備という正反対のことを押し付けたのです。

そして1951年4月、朝鮮戦争の最中、中国に進撃すべしとするマッカーサーは、第三次世界大戦を危惧するトルーマン大統領と意見を異にし解任され、「老兵はただ消えて去るのみ」と言い残し引退します。

歴史の舞台で主役を演じたマッカーサー。しかし、私たちが学ぶことはその舞台は誰がつくったのか。そしてその舞台装置を演出する背景を学ぶことが大切だと思われます。英雄は時代の要請で登場しますが、歴史の舞台は世界の国々の人民が創り出すということを基本に据えたいと思います。

＊第二次世界大戦は参加国59か国で文字通り世界大戦となり人類史上最大規模の戦争犠牲者、物的

損害をもたらしました。そのような戦争の中から平和の尊さを求める世界人民は立ち上がり“新しい時代精神”を創り出していきました。

その落とし子が日本国憲法です。

そして、第二次世界大戦の性格や、日本と同じ敗戦国のイタリア・ドイツとの敗戦・占領の比較検討、戦後の新しい国際情勢となる米ソ冷戦などがどのように影響して9条を歪曲していったかを理解していくことが必要かと思います。

今回は憲法前文について触れてみたいと思います。

１７ 憲法前文なくして９条は語れない

人間社会の歴史はそのときどき時代の様相によって異なりますが残念ながら戦争と平和の繰り返しでした。

わずか8軒の百里農民が、“戦争はダメ、平和が一番。少しでも暮らしがよくなるように”と、口癖にしながら土地を売らず農業に励み、憲法9条を素直に受け止め、基地反対を続け天寿を全うしました。このような気持ちは百里農民の独自のものではなく、古今東西、遠い昔から現在まで世界の人々が願い追い求めてきたものです。人にとって平和とは誰しもが生まれ持っている人類愛（ヒューマニティ）に根ざしているものです。戦争はそれとは違い、人間社会が生み出してきたものです。この誰しもが平和に生きる権利を謳ったのが憲法前文です。

前文は言う。「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」と。はじめに、特定の国の人とか、宗教、身分、資産の有無にかかわらず全世界の人が等しく平和に生きる権利を持っていることを確認しています。この事はこれまでの人間の歴史でも現在でも差別の問題として極めて大切な指摘です。

そして平和に生きる権利は、「われらは、いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従うことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立とうとする各国の責務であると信ずる」と。ここで平和に生きる権利を自ら求めようとする時は、他国と対等な関係でなければならず、その事は各国の責務であると、義務づけています。これは国際連合憲章の前文にもってきても充分通用すると思います。

最後に、「日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓う」そして日本国民は自らの証しとして、憲法9条で戦力不保持・戦争の放棄を9条で謳い、人間社会にあって戦争をなくすという理想に向けて第1歩を自ら実践したのです。憲法9条は憲法前文と不離一体の関係にあります。

１８ アメリカ独立宣言、フランスの権利の章典と日本国憲法

また、第3章の「国民の権利及び義務」（10～40条）の条文は人として生まれながらに持っている権利が記されてあり、人間社会において変えることのできない普遍性をもっているものです。アメリカの「独立宣言」（1776年）やフランスの「権利の章典」（1978年）に匹敵するものです。

アメリカの13州がイギリスから独立をする際の独立宣言（1776年）には、「すべての人は平等に造られ、造物主によって一定の奪うことのできない権利を与えられ、その中には生命、自由および幸福の追求が含まれる」と記されています。しかし、アメリカも対イギリスの独立宣言とは裏腹に黒人奴隷制は維持され、奴隷解放の南北戦争（1861～65年）が起こり16代大統領リンカーンは暗殺され、現在に至るも人種差別は残っています。

また、1978年フランス革命の「人および市民の権利宣言」、第1条は「人は自由、かつ、権利において平等なものとして生まれ、生存する」、第3条「あらゆる主権の淵源は本来的に国民にある」、第4条「自由とは、他人を害しないすべてのことをなしうることにある」とあります。この権利の宣言の「自由・平等・博愛」は現在のフランス共和国憲法の標語となっています。しかし、平等と言っても資本主義経済の本質上、労使の階級差別の解消は困難です。

独立宣言にしても権利の章典にしても、その実現の困難さがあるからと言って歴史的意義は少しも減ずるものではありません。人も社会も理想に向かっていくことが歴史の歯車を前進させます。9条は理想だと言って、軍事力には軍事力で対応するという自公政権が推進する自衛力の拡大強化、日米安保再編強化が愚かであることは明らかです。狭い日本列島に50以上の原子力発電所がある日本で、なんで戦争などができるでしょうか。

（次号につづく　伊達郷右衛門）

百里群像①

宮沢昭さんと満蒙開拓青少年義勇軍

旧満州の旅の思い出から

「百里の会」　栗又 衛

このシリーズ「百里群像」では、百里基地反対闘争を彩った闘士たちを紹介していきます。

第1回は、百里基地反対同盟の委員長だった宮沢昭さんです。東日本大震災の前年2010年9月14日に、82歳で逝去されました。その時の池田眞規弁護士による「別れの言葉」の一部を紹介します。

「戦争のためには土地を渡さない」という揺るぎない理念を貫徹し続けて闘う姿に魅せられて、親しくさせて戴いたことは、私の人生に大きな心の支えでありました。次々に防衛庁に切り崩されてゆく同盟の衰退の地獄の中で、子ども達に土地を守る闘いを受け継いで貰おうと、水のない百里で地下水を汲み上げて「ゆたかな水田をつくる」という農民の大きな夢を実現して、百里の古老を仰天させた、あなたの驚くべき執念と偉大な功績は不滅です。

満蒙開拓青少年義勇軍だった宮沢昭さん

宮沢さんのこのような不屈の開拓精神は、満蒙開拓青少年義勇軍の体験から生まれたものだと思います。百姓とは縁の無い東京生まれの宮沢さんは、満蒙開拓青少年義勇軍に志願し、内原の訓練所を経て満州の訓練所に送られました。そこで軍隊のような生活を強いられながら、真冬には零下30度にもなるような極寒の地で農作業に従事しました。ソ連軍侵攻後は義勇軍の少年達はもちろん開拓団の人達も安全な地を求めて逃げましたが、日本軍に見捨てられた人々は遠くに逃げることもできずに途方に暮れていました。その中で宮沢さんは幸運なことに、「尚志（しょうし）」の中国人の家に1年近くもかくまって貰ったそうです。

宮沢さんが入った義勇軍の訓練所は、ハルビンの北に位置する「一面坡（イーメンポ）」にありました。かくまって貰った「尚志」は隣町です。訓練所も開拓団の土地も中国人の農地や土地を奪ってつくられたものでしたから、もちろん中国の人々は日本人に恨みを抱いていました。

①

1991年2月、「一面坡」訪問

宮沢さんと義勇軍仲間のお二人、そして私の4人で、義勇軍の訓練所があった「一面坡」を真冬の1991年2月に訪問しました。1989年の天安門事件の余燼がまだくすぶる中でしたから、個人宅の訪問はできず、「尚志」の人民委員会に招待状を出して貰い、その役所を訪問しました。人民委員会の幹部の方々から、乾杯で歓待していただきました。「許そう、しかし忘れまい」ということだったのかなと思います。豊かになるために日本と交流したいとの思いも伝わってきました。そして、一面の雪に覆われた訓練所跡（写真1）を訪ねることができました。

1997年8月、中国の「恩人」に再会

1991年には「尚志」のかくまってくれた家庭を訪問することができなかったため、6年後の真夏に再訪することになりました。せっかくの機会なので他の人も誘い、旅順の二〇三高地、平頂山事件記念館、9・18記念館、731部隊記念館なども訪問することとして、5人で旧満州を旅しました。

②

「尚志」では、写真2のように50年ぶりに恩人の1人に再会することができました。宮沢さんは感謝の言葉と記念品を贈りました。さらに地元の方々の案内で、訓練所や開拓団の跡を訪ねました。米づくりも始まるなど、ゆたかな農地が一面に広がっていました。村の人達が集まってきて、当時の写真を珍しそうに眺めていました（写真3）。中国人も日本人も血と汗を流した場所です。その近くに、日本人が建てた「我が青春　命の恩人　この地にありき」の石碑がありました（写真4）。

③

④

被害者である中国人の中にも、加害者である日本人をかくまい、助けた人たちがいることを忘れてはならないと思いました。もちろん、中国を侵略し、満州国をつくり、多くの中国人を犠牲にした（中国政府は1200万人としている）ことを忘れてはなりません。